

# 英国の反グローバリズム・反 EU

—— その真意は何か、先行きは？

グローバル化を率先して行ってきた国だからこそ、  
英国はその限界にぶち当たっている。

在英ジャーナリスト  
小林恭子

## 「これ以上は無理だ」

英国は 2016 年 6 月の国民投票によって、「欧州連合 (EU) からの離脱」(Brexit、ブレグジット) を決定した。実現は 19 年 3 月 29 日で、この日まですでに 1 年を切っているが、具体的にどのようなかたちになるのかが見えてこない。

ブレグジットは当の EU や世界各国から、内向きの、閉鎖的な動きとして受け止められてきた。離脱運動の先頭に立った英国独立党の党首(当時) ナイジェル・ファラージやボリス・ジョンソン元ロンドン市長が「英国を国民の手に取り戻そう」と呼びかけ、離脱支持の国民に強くアピールした。両者は「米国、第一」というスローガンを繰り返すトランプ米大統領と同列に語られ、リベラル系メディアの一部はファラージをロシアのプーチン大統領やトルコのエルドアン大統領と同類として扱った。



「独立国として世界に再参加しよう」と呼びかける、英国独立党のファラージ党首 (役職は当時。16 年 6 月 24 日のツイート)

しかし、こうした批判はあたっているのだろうか。離脱決定によって、英国が欧州統合の深化に対して「ノー」という声を上げたのは事実である。しかし、16 世紀末以降の大航海時代から世界を股にかけて商業活動を行い、大英帝国を築いた英国が、ここきて急に閉鎖的な、保護主義的な国として変化を遂げているわけではない。グローバル化を率先して行ってきた国であるがゆえに、その限界にぶち当たり、「これ以上は無理だ」と国民が言い出したのがブレグジットではないか。

EU という鎖から解き放たれ、非 EU の世界の中の国と自由でかつ自国にとってより有利な商業活動を行うことを目指す英国は、グローバル化の波から退却するのではなく、さらに大きなプレイヤーとして戦おうとしているようにも見える。

## 無制限に人が入ってくる不安

第二次世界大戦後の欧州統合の動きの文脈で言えば、グローバル化は 1989 年 11 月、独ベルリンの壁の崩壊を契機として始まった。資本、サービス、モノ、人の自由な行き来が加速化され、各国の経済の相互作用が強まると同時に国家の役割が大きく縮小した。止めることができない市場経済の原理が動き出した。

グローバル化の波に乗れない人々の声が隠されたままで進化していった EU は、単一市場、単一通貨、単一の金融市場へと統合の度合いを強め、ゆくゆくは政治統一を目指すようになった。しかし、EU 市民の中には「グローバル化で生活が良くなる」、「EU 加盟によって、恩恵がもたらされ